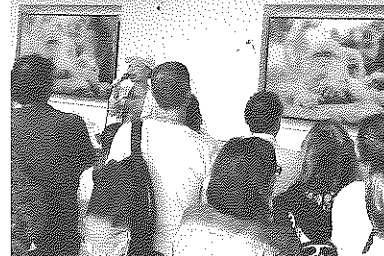
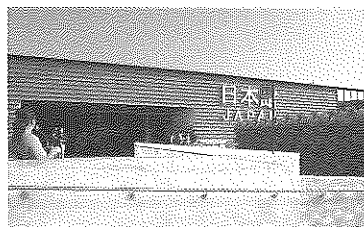


◀日本館では日本の食と農に関する幻想的な空間が演出され、人気を集めた

17時頃の日本館前。まだ4時間待ち▼



日本館の外観▶



▲開場直後の日本館内のようす。入口には、この時点ですでに6時間待ちの列

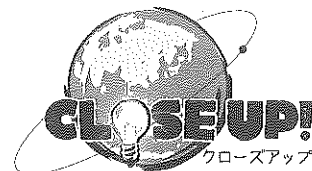


◀日本フードエコロジーセンターが企画した「ミラノ万博とイタリア食の視察8日間」には、廃棄物処理業者、NPO法人などから約20人が参加。ミラノ万博を視察後、ミラノ市内のワイナリー、プラ市のイタリア・スローフード協会、バルマ市の生ハム工場の視察を経て、最後はフィレンツェ市内を視察した。写真は、フィレンツェ市内のみかけた分別ボックス

今回の万博に合わせて「ミラノ万博とイタリア食の視察8日間」と題する視察ツアーを企画(株小田急トラベルが実施)し、現地を視察した日本フードエコロジーの高橋巧一社長は、「食と廃棄物の問題は、人類共通の課題として、一層顕在化していくだろう。今後は我々が国内で構築した食品リサイクルのモデルを海外で根付かせることも視野に、人材育成に力を入れていきたい」とコメントしている。W

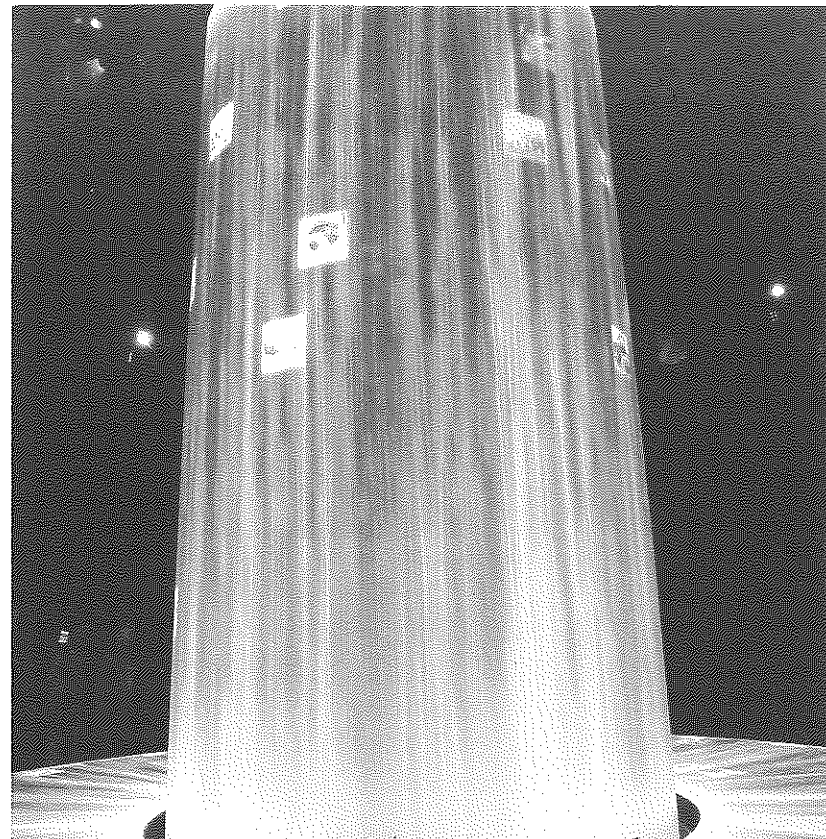
「地球に食料を、生命にエネルギーを」のテーマのもと、2015年5月1日から10月31日までイタリア・ミラノで開かれたミラノ国際博覧会(ミラノ万博)で、「共存する多様性」を掲げた日本の出展が大きな注目を集めた。日本館では、農と食、食文化に関する1000を超えるコンテンツを光の滝のなかに一望できるゾーンも設けられ、食品リサイクルの関連で、エコフード事業を展開する(株)日本フードエコロジー(神奈川県相模原市)や、バイオガスを発電と高付加価値農産物の生産・販売を手掛ける(株)開成(新潟県村上市)のコンテンツも紹介された。

### 食品リサイクルの情報発信



# 大人気の日本館で「ロスゼロ循環」の取り組み紹介

ミラノ万博フォトレポート(写真提供:日本フードエコロジーセンター)



▲日本館の展示で特に目立っていたのが、「ダイバーシティ(多様性)の滝」。予めインストールしておいたスマートフォンの日本館アプリを起動させてセットすると、自分のエリアが青く発光。興味のある画像にタッチすると、その画像と詳細な情報が自分の目の前に移動し、スマートフォンに取り込まれるという仕掛け。日本フードエコロジーセンター(写真左下)の取り組みがここで紹介された



▲開場直後から長蛇の列ができた入口付近のようす(左)。屋頂にはご覧の通り(右)。主催者発表によると、9月20日時点で総来場者数は1500万人を達成。最も人気のあるパビリオンの1つとなった日本館は、9月17日に総来場者数150万人を突破した